

イラン国王ナーセロッディーン・シャーの欧州各国歴訪紀行（1873 年）をめぐって

——“シャー”のまなざしの政治文化史的比較考察——

ヨース・ジョエル

高知県立大学 文化学部教授

要旨

アジアにおける帝国主義が全盛期をむかえる 19 世紀後半は、欧州列強がアジアの広い範囲に侵入していく時期である一方、アジアから多くの人が欧州を訪れることが可能になった時代でもある。その中で特に注目を集めるのは、アジア各地からの使節団や君主らによる欧州の視察とその記録である。ここで主に取り上げるイラン国王の訪欧ならびにその訪問記と、ほぼ同じ時期に欧州を見学した岩倉使節団とを様々な角度から比較する。その政治的背景と欧州での言動は大きく異なるし、その成果もけっして同一であったといえない。だが、訪欧とその記録という行為が包含する「まなざし」は、同じ枠組みでとらえ考察するのにふさわしい比較材料が豊富である。欧州・イラン・日本の三角関係に関する考察は、けっして成功—挫折という対立軸だけで片づけられない奥行きをもつ、政治文化史的なパースペクティブを提供してくれる。

キーワード ナーセロッディーン・シャー 欧州訪問記 岩倉使節団 近代化 イラン史

はじめに

19 世紀のイラン¹と日本は同じく西欧列強の世界戦略に悩ませられる立場にあった。中央アジアとアラブ世界、またトルコとインドとの間に位置するイラン帝国は、ロシアと英国という二つの巨大勢力に挟まれ、領土や関税自治権などを奪われていく。アジアの東端に位置する日本は、黒船来航以降アメリカをはじめ数多くの西欧諸国と不平等条約を結ぶ羽目になる。両方とも占領と植民地化という憂き目を回避したが、近代において両国が歩んだ道は決して同じようなものではない。イランの 19 世紀後半は改革の導入とその挫折が繰り返される時代である。政治制度の近代化が実現するのは、1906 年のことである。その時点で、日本はすでに富国強兵策の集大成を迎える。つまり、日露戦争で勝利をおさめ日英同盟という形で「列強に伍する」という 40 年来の目標を達成する。地理的条件や歴史や宗教など、そのすべてが異なる二国の「成功」と「挫折」を単純に比較することは難しい。ただし、1873 年という早い段階での動き、つまり訪欧とその記録について確認しそれぞれの置かれた状況の特徴と限界について考察することはできる。具体的に言えば、改革派の宰相に促され渡欧するイラン国王と、同じ時期に新政府の要人たちを世界一周の研修旅行に駆り出す特命全権大使。考察の軸足を前者に置きながら、また欧州観察というプリズムを通して、イランと日本とを同じ座標で捉えてみたい。国王の観察は、君主という特殊な地位にある人間による観察であるが、その観察の記録には、意外にも、「近代」という挑戦に直面するイランというもう一つの視点がおよそ欠如している。では、イラン国王の記録は何であったか。

ナーセロッディーン国王の欧州訪問—国内外の情勢

明治初期の岩倉使節団が米国と欧州各国の歴訪に旅立ったのは、1871 年の 12 月であり、今年で 150 年前のことである。帰国は 1873 年 9 月であり、1 年半以上の長旅である。海路と陸路による旅の危険と苦労もさることながら、もっとも驚くべきなのは、一国の政府の要人たちが 20 カ月という長きにわたって権力の座を空けた事実である。日本の近代史だけでなく、世界史的観点からみても、実に大胆な外遊である。1868 年の明治維新を本格的な〈革命〉として位置付けることはむずかしいが、極めて重要な政治的転換であったに違いない。その大きな転換がもたらした政治や社会の変化と不安は、1871 年に完全に収まっていたわけではない。戊辰戦争に終止符が打たれるのは出発の 2 年前、1869 年の初夏であるが、各地で不平不満の士族による反乱や農民一揆が後を絶たない。しかも、新政府の指導者たちが着手した数々の改革のなかには王政復古の色彩が濃いものも多く、近代化の基礎工事を無事に終えるどころか、その方向性すら定まらない状況であった。岩倉らが後にした日本は、

¹ 当時の日本では、欧州で使われる国名に従って、ペルシア（波斯）として知られていた。イラン人は、19 世紀において自国をすでに「イラン」と呼んでいた。

新政府の権力基盤が確固たるものとなっていたとは言い難い。それでも、使節団の派遣に踏み切ったのである。

けれども、岩倉らのような大使でなく、一国の君主自らが長い旅に出ることはさらにめずらしい。めずらしいが、例がないのではない。まず、岩倉らの 175 年前に、ロシアのピョートル大帝が 17 カ月にわたる欧州の旅を敢行したことがよく知られている。自らの権力を誇示するロシアの君主としてではなく、ロシアの近代化を図ろうとする改革者としての強い意気込みは、ピョートルが派遣団の一員を装いオランダの造船所で働いていた事実からも分かる。未曾有の外遊の成果については、評価が分かれている。「ロシアを救うどころか、かえって精神的な苦悩のどん底に突き落としたのである」とされる一方、つぎのような分析もある。

「たしかに、ピョートルは上流階級の女性に強制的に西欧風のドレスを着させ、西欧風のダンス・パーティに出席させたり、男たちにはあごひげを切ることを命令して、したがわかない者には『ひげ税』を払わせたりした。しかし、ピョートルの改革を一方的に、[中略]『西欧模倣』『舶来崇拜』といった見方をすると、矛盾だらけに思えてくる。なぜなら、ピョートル改革には西欧化と同時にロシアへの執着があり、伝統の拒否と同時に保存の面があるからだ。」²

西欧風の衣装の導入など、明治初期の日本のそれと通じる描写は興味深いが、これより詳しく立ち入らない。肝要なのは、古いものを活用したり場合によって新しいものを拒んだりするような複雑な一面を持ちながらも、岩倉らの明治期日本と同じく、新しいものが導入され国力の増大を図る改革が行われたことである。そして、ロシアは実際に軍事力を高めユーラシア大陸にまたがる大帝國を築いていくことに成功した。それは、19 世紀にナポレオン・ボナパルテの大軍を打ち滅ぼしたり中央アジアでイギリスとのぎを削ったりするような軍事力であった。だが、強力な帝國であるロシアが近代國家へと生まれ変わることはなかった。むしろ、ピョートルの訪欧から 175 年経ってロシアをふくむ欧米の「回覧」に踏み切り西欧をモデルに強引な富国強兵策に乗り出した日本との戦争に敗れ、波乱に満ちた 20 世紀を迎えることになる。

アジアの君主みずからが欧州諸国を訪問する例は、19 世紀において、ほかにもみられる。オスマン帝國の皇帝（スルターン）アブデュルアズィズ（1867 年訪欧）、またタイ國（当時シアム）のチュラロンコン王（1897 年訪欧）も、欧州を視察し記録を残している。それぞれの訪欧がもたらした効果、つなみに、トルコもシアムも、日本同様、英仏などによる植民地化を回避したが、これらの訪欧との関連については、他の研究にゆだねる。³ ここで注

² 藤沼貴『ロシア その歴史と心』（第三文明社、1995 年）、184～85 頁。

³ Mustafa, Serdar Palabiyik, “The Sultan, the Shah, and the King in Europe: The Practice of

目したいのは、岩倉使節団とほぼ同時期に渡欧した、もう一つの使節団である。

1873 年の 4 月 19 日に⁴、25 年前からイラン国王の座に就いたナーセロッディーン・シャー・ガージャール⁵ が欧州を目指して、首都のテヘランを発ちカスピ海に面したバンダレ・アザリーに向かった。国王は、国内、またオスマン帝国の支配下にあったイラクにあるシーア派の聖地を巡る旅にも出たことがあったが、欧州歴訪は初めてであった。岩倉使節団の旅程と比べれば、いくらか苦勞が少なく見える。ロシア側のカスピ海岸に位置するアストラカーン港からヴォルガ川を上りツァリーツィン（現ヴォルゴグラード）で鉄道に乗り換えモスクワへ。9 月 23 日の帰国（テヘラン到着）まで、主に汽車による移動である。陸続きであるイランなので当然と言えば当然である。海路は、ドーバー海峡の往復、イタリア南部の布林ディジからイスタンブールを経由して比較的に穏やかな地中海と黒海の航海、そして最後の一日のカスピ海の渡航（300 キロ程度）のみである。国王は頻りに船旅が嫌いであることを表明しているが、イタリアの南端からイスタンブールに向かう船は、スルターン自らのヨットが提供され、十分に快適であったようである。この訪欧の旅が大変な事業であった要因は、しかし、君主の船酔いのほかにあった。

まずは、国王を取り囲む宮廷の事情がある。1873 年の時点で、ガージャール朝はすでに 80 年ほどイランを統治し、侍従長から（国王の晩年に 100 人まで膨れ上がる）ハレムの宦官まで、公私の用務に従事する官人や宮人たちの数は 1000 人を超えていたとされる。首都を離れる際、その多くが国王の世話をするためにともに移動することになっている。1867 年にイラン東部のホラーサーンを旅した時、ハレムの女性たちのためだけに、6 頭ずつの馬が牽引する馬車を 60 台用意した。欧州の旅の場合、さすがに無理な注文であった。何人かの妻を連れていくことにした国王は、改革派の高官で使節団長でもあるミルザ・ホセイーン・カーンの助言を聞き入れロシアに入る前に女性たちをイランに返した。そして、モスクワで最もお気に入りの妻アニスをも帰国させたと伝えられている。

旅先でのハレムはともかくも、イラン国がかかえる政治的、そして文化的＝宗教的体制の束縛を、しかし、高官の提案一つで解くことはできない。ガージャール朝の支配体制の基盤

Ottoman, Persian and Siamese Royal Travel and Travel Writing” in: *Journal of Asian History* 50(2), 2016 年, 201～234 頁。

⁴ 同日に、岩倉使節団がデンマーク国王と謁見する。ロシアを後にしてプロシャやハンブルクを経てのデンマーク訪問である。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761505/141>（国立国会図書館 特命全権大使米欧回覧実記、第 4 篇 欧羅巴大洲ノ部 中 一四九）参照。

⁵ ペルシア語：ناصرالدین شاه قاجار。この小論において、紀行文のフランス語訳を使うが、次の表記となっている：Nâser Ed-din Shâh Qâjâr。英語の資料では、Naser al-Din Shah Qajar と表記される。ここで「ナーセロッディーン国王」と表記する。

は、相対立する地方勢力のバランスであった。絶えず諸勢力の調整が求められ、決して安定しているわけではない。このような危うい均衡、というより、到底埋めることが出来ない対立は使節団内でも存在した。使節団は、70 人ほどの大臣や高官たちからなったが、国際経験豊富で複数の外国語を操る上述のミルザ・ホセイン・カーンをはじめ近代化に積極的な人たちがリードする一方、国王と血縁関係にあり国内で一定の実力を有しながら欧州各国を模した改革に関しては否定的な参加者も多かった。イラン国内では、1848 年と 1888 年の間に 169 件の蜂起、騒擾、地域的抗争、陰謀などが記録されている。ただし、「理由も、増税、パン不足、食料価格の高騰、為政者の専横・圧政とさまざまであるが、いずれも一種の生活闘争であり、何らかの新しい社会的理念や主張、あるいはその萌芽を確認することはできない」⁶ わけである。国王率いる使節団は分裂された国を後にしたというより、国の分裂を内包したまま欧州へ渡った。

その分裂は国王自身の改革に対する優柔不断としても現れる。もちろん、一国の改革のなりゆきを国王自身の意欲や能力のみに帰するのは、あまりにも手厳しいかも知れない。国王は芸術肌で、旅が好きだけでなく、絵の才能があり、行く先々での見聞の言葉による描写も評価が高い。ところが、世間離れをした、政治的権謀術数と縁のない君主であったわけではない。彼の在位期間はほとんど半世紀におよぶ。実は、大臣たちに政治を任せるのではなく、1871 年にミルザ・ホセイン・カーンを任命するまで 15 年にわたって「親政」を行った。1852 年に、イランの近代化を軌道に乗せるため教育や軍の改革に着手した宰相を宮廷中に生じた対立のために処刑させた「功績」もある、生殺与奪の権を恣意に行使するデスポット（専制君主）の顔ももっている。⁷ 1896 年に祈祷中に暗殺されるという血腥い最期をむかえるが、その絶大な権力をイランの確実な近代化のために活用することはなく、その統治の間、改革が成功したとは言い難い。

そのような不得要領とした姿勢を印象付ける例の一つ、また国内情勢を緊迫させる要因に、バーク教の反乱とそれに対する弾圧をあげることができる。1844 年に出現したバーク教は、イスラーム教の既存のウレマー（教義を解説しその持続性を保証するイスラーム学者たち）を批判し、女性の扱いの改善や過酷な刑罰の廃止などさまざまな改革を唱えていたが、容赦なく迫害された。にもかかわらず、各地で蜂起が相次いだ。この運動の意義は、しかし、教義の解釈に留まるものではなかった。

「一部には租税や個人的所有・保有の廃止、さらに財産の共有を唱える者もあらわれた。アラブ人地域の聖地ではなくイラン・ザマーンにこだわったこと、聖典『バヤーン』がペルシア語で書かれるイラン古代の太陽暦を用いたことなど、バーク教との運

⁶ 羽田正『イラン史』（山川出版、2020 年）、184 頁。

⁷ Michael Axworthy, *Iran, Empire of the Mind: A History from Zoroaster to the Present Day* (Penguin, 2008)、195 頁。

動に宗教的に表現された一種のイラン・ナショナリズムを読みとることもできるかもしれない。」⁸

皮肉にも、バーブ教の弾圧に尽力するのは、国家権力が先導する改革を進めようとするアミーレ・キャビールであった。アミーレの努力にもかかわらず、バーブ教はバハーイ派として蘇り蜂起をし続ける一方、社会と経済の改革は思うように進められなかった。ちなみに、上で述べた「処刑された宰相」が、まさに、同じアミーレ・キャビールである。

訪欧団が抱える最も喫緊な問題は、ハレムでも国内の情勢でもない。ガージャール朝が支配する 19 世紀のイラン社会が見舞われる数々の問題の主な原因は、欧州列強によるイランへの経済的侵入であった。国王が直面するのは、実に悩ましいディレンマである。列強を撃退するために、改革が必要である。ただし、近代化を推し進め国力を増長させるのには、知識と資金が必要であり、欧州にある技術と財源を獲得する必要がある。改革派の高官らは、列強の対立を巧みに利用してイランへの投資をおびきよせようとするが、その代価は大きい。19 世紀のイランは、はるか東方の中国と日本と同じく不平等な条件でいくつもの条約を結ばせられるだけでなく、まさしく、外国人たちに国の経済全体をのっ取られようとする。一方、世界経済への編入によってイランの普通の人々が経済的に苦境に立たされてしまう。使節団がイランを出発する 1、2 年前は、飢餓が頻発して人口の 10 分の 1 が犠牲になったともされる。その主な理由は、伝統的な穀類のかわりに綿や阿片など輸出向けの換金作物の栽培に力を入れたことである⁹。

国際情勢が厳しさを増していく中で、イラン国王にアクロバット並みの外交の「曲芸」が求められた。国境が少しずつ定まっていく 19 世紀のイランは、カフカス山脈を超えてカスピ海の海岸を南下してくる帝政ロシアに対して、対立と協力の外交政策を繰り返していく。同時に、インドで支配権を強めアフガニスタンとペルシア湾に徐々に勢力圏を拡大する大英帝国とも手を携えては距離をとろうとする。そのほか、ナポレオン・ボナパルテのエジプト遠征（1798～1801 年）以来中東において足がかりを得ようとするフランスと手を結ぶ時期もある¹⁰。第一世界大戦にいたる 19 世紀末期と 20 世紀初期に、ドイツ帝国もまたイランを舞台に英国と張り合う。その曲芸もむなしく、19 世紀をへて、英国を中心に列強の侵入に拍車がかかりイラン経済の「従属化」が完成するとされる。¹¹

イランは、戦略的な位置にあるのみならず、帝国主義の絶頂期を迎える欧州の植民地保有国にとって魅力的な資源供給地と見えた。実は、永世中立をとなえる（——だからこそロシアからも英国からも敵視されなかった——）新興国のベルギーですらイランでの鉄道建設

⁸ 羽田、186 頁。

⁹ Axworthy、198 頁。

¹⁰ Axworthy、182 頁。

¹¹ 羽田、172～183 頁。

やほかの利権に興味を抱く実業家と外交官たちが現れた。ナーセロッディーン国王がベルギーを訪れた際、ブリュッセルで迎えてくれるレオポルド 2 世国王の立派なひげに感心したが、アフリカ（コンゴ）はもちろん、中国などでの利権の獲得にも余念がなかったひげの持ち主がイランへの投資にあまり興味がなかったことはむしろ幸いと言えよう。¹²

従属化というのにふさわしい状況の例として、ロイター通信社の創始者で後々日露戦争の際にも暗躍する英国のロイター男爵が取得した利権が象徴的である。

「その内容はたんにカスピ海からペルシア湾に通ずる鉄道の敷設にとどまらず、路面電車の設置、石炭・鉄・石油などの地下資源の採掘、森林資源の利用、河川整備、堰堤建設、貯水槽設営、掘り抜き緯度や運河の掘削、税関の管理運営、銀行設立、街頭の塗装・整備・郵便・電信線の設備・製粉所・工場・作業所などの建設と、鉄道建設に関するあらゆる分野が盛り込まれて」

いた¹³。結局は成立・履行されることがなかったが、事態の深刻さを理解するのに役立つエピソードであろう。一方、地下資源の開発と紙幣の発行権は英国資本の利権となった。英国と張り合うロシアは、イラン北部とロシアをつなぐ電信や鉄道、また鉱山採掘などの利権を取得していた。逆に、支配体制の維持や着手される改革に伴う出費のため政府が外国から次々と借款をうけることで、イラン国民は近代化の成果を享受することなく多額の借金を背負わせられた。

たとえば、鉄道である。近代の象徴とされる鉄道の建設において、イランは致命的な立ち遅れを食らった。なぜなら、イランが鉄道網の開発によって国軍の機動力を大幅に高めそれぞれの国境地帯にすぐに派兵できる能力を有することは、英国にとってもロシアにとっても、都合がよろしくなかった。そのどちらかが賛成すればまだしも、両方が反対すれば資金調達も実際の建設もほぼ不可能であった。ナーセロッディーン国王がはじめて列車に乗ったのは、まさに、欧州に向かう 1873 年 5 月 16 日の早朝、ロシア南部のツァリーツィン駅である。日本の新橋横浜間の鉄道開通の翌年である。国王が暗殺された 1896 年当時、イラン全土にわずか 7 キロほど（新橋と横浜との間の距離は 30 キロ程度）の鉄道しか敷設されていなかった。テヘランとその南にあるシャー・アブドラジーム寺院を結ぶ狭軌鉄道がベルギー人によって敷設されたそうであるが、それは小国であるベルギーの技術と経済の力を示す一方、鉄道開発の遅れと英露対決という地政学的真因を如実に表す事態であると言える。¹⁴

¹² Dumoulin, M. “Les premières années de la présence belge en Perse (1887-1895)” in: *Revue Belge d'Histoire Contemporaine*, vol.8, nos.1-2, 1977 年, 1～52 頁。49 頁。

¹³ 羽田、180 頁。

¹⁴ Axworthy, 196 頁。

ただし、19 世紀後半は停滞と隷従だけの時代でなかったのも事実である。ナーセロッドディーン国王によって進められた改革は、3 つの波となってイラン社会に大きな影響を及ぼした。最初の試みは、アミーレ・キャビール在任中に着手された改革である。そのなかで、欧州の講師を呼んで運営したダーロールフォヌーン校の設立、軍の近代化（徴兵制度の導入や近代的軍事訓練の充実、兵器工場の創設）、また農業と商業（主要都市におけるバーザールなど商業施設の建設）の改革が目立つ。¹⁵ 第 2 の派は、ナーセロッドディーン国王の親政とそれに続くミルザ・ホセイン・カーンが宰相を務めた時期の改革である。電信の普及のほかに、司法制度や学校教育の改革がなされた。イラン経済が世界経済に編み込まれるのにつれて、外国製品が流入し国内の工業が大きな打撃を受ける一方、ペルシア絨毯が世界市場に出回るようになった。欧州旅行が行われる時期に、医学や薬学などを講じる近代的高等教育機関のほかに、ガス灯や郵便制度も導入されはじめる。サレス氏を書くように、¹⁶

「ペルシアでの物質的な進歩は虚構である。あらゆるレベルでの汚職は経済と国の運営を麻痺させている。高度な知識を持つ人材と財政手段の欠乏は近代的設備の建設を不可能にした。通信手段の欠如は飢餓を悪化させる。なぜなら、生産的な地域から物資が不足している地方へ農産物を輸送することができない。都市の道路は、舗装も街灯もない。路面は悪天候のために利用ができない。旅行者は大変質素な郵便小屋に、あるいは外観は素晴らしくてもまったく快適でないカラヴァンサライに泊まらざるを得ない。

同時に、極めて重要な意味をもつ技術がこの時代のペルシアに浸透する――西洋の理念と情報の伝播を可能にする印刷と電信である。この最初の欧州訪問の時代に現れ始める立憲運動が成功するのは、まさにこの二つの要因のおかげである。」

イランで国会等ができるのは、国王の死後 10 年であり、平等な国際関係はさらに時間がかかっている。イラン国王は、国内の諸勢力の争いにおいても、国外の列強の角逐においても、実にむずかしい均衡を保ちながら、改革を進めなければいけない立場に置かれている。訪欧の目的は、その突破口を模索することであったと言える。

近代の波が押し寄せてくる中、イランと日本がたどった一途は決して同じではない。その観察に間違いはないが、両者の差異を際立たせるあまり、その共通性を見逃してしまう恐れがある。「普遍」と「特殊」とは、絶えることのない緊張関係にある。普遍的な近代を原動力とする世界経済がそれぞれの国の庶民に強い負担と困窮に対する反発を歴史（学）的

¹⁵ 歴史学研究会編集『世界史史料 8、帝国主義と各地の抵抗』（岩波書店、2009 年）、215 頁。

¹⁶ Bernadette Salesse（編集と仏訳）、*Journal de voyage en Europe (1873) du shâh de Perse Nâser Ed-dîn Shâh Qâjâr* (Sindbad, Actes Sud: 2000)、19 頁。

にとらえるとき、イランの特殊性なり日本の特殊性なりを強調し国史を中心とする枠組みでは、その土地が持つ特殊な事情だけを重視してしまう。そうすると、岩倉使節団とナーセロッディーン国王の同時期の訪欧は単なる「偶然」で終わってしまいます。19 世紀において、イランの人々が状況を改善しようと手にした武器と、1880 年前後に日本（東京、高知…）の人々が頼りにしたもの——国会の開設、憲法の制定、主権が尊重される平等な国際関係の訴え——とが共通していることは、もちろん、偶然ではない。それらに至る道のりの長さを暗示する一つの出来事として、ナーセロッディーン国王の訪欧とその記録に目を向けよう。

王のまなざし—フランスに関する記述

ここでは、157 日におよぶ訪問の日記を全部紹介することはできない。全訳をするのであれば、手元にあるフランス語版ではなく原著から翻訳した方が望ましいし、ペルシア語だけでなくイランの歴史や社会的事情に詳しい研究者にゆだねたい。ここでの紹介と分析を、日記の一部分に絞りたい、つまりフランス滞在の部である。一部分に絞ることで、重要な記述を見逃してしまう恐れがないのではない。ナーセロッディーン国王が尊敬してやまない、訪れてみるとさらに気に入った英国、またはイランと領土を接して何度も衝突と（壊れやすい）和解を繰り返してきたロシアに関する記録は、とくに気になる。国王の態度、またイランの国運を左右するような交渉や意見交換の記述がないとは限らない。ただし、実際に読んでみると、そのような個所が見当たらない。むしろ、そのような記述は全文を通してあまりない。本文は政策や外交の行方を左右する交渉という観点のみから見たばあい、それほど大きな意味を持つものではない。

もちろん、まったく無関係ではない。訪問団の出発前に問題となったロイター男爵への利権移譲（コンセッション）は、実現することがなかったとしても、記憶に新しかった。最高の栄誉とされるガーター勲章を授与されるなど、親英派である国王の英国での歓迎ぶりは格別であった。ロシアでの待遇は、ロシア皇帝との謁見の記録を読む限り、満足のいくものであったが¹⁷、ロイター男爵の件でロシアの権益が著しく損なわれようとしたことを考えれば、文句なしの歓迎ぶりの表面化でさまざまな思惑が渦を巻いていたに違いない。ただし、そのような屈折した関係を思わせるような記述は、見当たらない。

さて、ここで滞在記をもう少し詳しく紹介するフランスはどうか。複数の列強（主にロシアとイギリス¹⁸）の力を借り微妙な均衡を保ちつつインドのような完全な植民地化を避けよ

¹⁷ Salesse 氏によれば、ロシアでの迎え入れは「心温まるような、親切的な」ものであった。Salesse、77 頁。

¹⁸ イギリスとロシアが中央アジアで繰り広げた勢力圏争いは、「グレート・ゲーム」としても知られている。たとえば、南塚信吾『「連動」する世界史——19 世紀政界のなかの日本』（岩波書店、2018 年）、117～123 頁。

うとするイランの外交政策において、ナポレオン・ボナパルテ（1812年にロシア遠征に失敗、1814年にワテルローで英国率いる連合軍に敗北）以降のフランスは主要な相手でなく、あくまでも脇役である。しかも、国王が訪問したフランスは、ナポレオン三世の失墜、普仏戦争での敗北とアルザス地方の割譲、首都を大きな混乱に陥れたパリ・コミューンという激動の数年が過ぎたばかりである。国王からすれば、そのような様相を呈するフランスに対して、一種の親近感があったとも推測される。

1873年のフランスの政治は、一種の異常事態にあった。1871年に帝政から再び共和国に戻ったが、プロシヤへの賠償金は国の財政を圧迫し、政治集会などもまだ厳しく制限されている。そのなかで、はるかオリエントから渡ってくる君主のために弾痕だらけのパリの街を飾り壮大な歓迎会を執り行う出費を正当化できる、それだけの相互利害が果たしてあるだろうか——そのような議論が沸き起こる。それでも、当時のフランスの外相ブロリ公爵は、「英国におとらない歓迎」を用意するように要求した。国賓としての歓待が決まったのは良いが、やはり、いくつかの妥協が必要であった。市庁舎はコミューンの混乱の中で焼失したので、歓迎会は観光名所の凱旋門で行い、食事でも車もより安価なものが選ばれた。逆に、政府は、せっかくの機会であるから、盛大に行えばパリ市民にとって久しぶりの「娯楽」にもなるし、花火を見に郊外からも多くの観光客が集まるだろう、とも考えたようである。国王は7月5日から20日までフランスに滞在したが、フランス革命を記念するパリ祭がまだ行われていない時代だった。¹⁹ いずれにせよ、花火を含む、それなりに盛大な歓迎が用意されたのである。

イギリスからドーバー海峡を渡る船（かつてのナポレオン三世御用の船）のなかで国王はひどい船酔いに襲われた。横になるしかなかったが、シェルブールに着くや否や、体調が改善し歓迎の花火をめぐる余裕も出た——7月5日の記述はこれで終わってしまう。国王のパリ滞在は2週間弱であるが、日記の記述は、7月6日の1日分（180～185頁）と、7日から19日までの13日分（185～220頁）という区分になっている。パリを後にしてからのフランスに関する記述は、ディジョンでの一泊（19日、1頁強、220～21頁）と、ジュネーヴに向かう（20日、1頁強、221～2頁）旅の描写で終わってしまう。つまり、パリでの滞在は、それまで一日または数日ごとにこまめに日記をつけていた国王に筆を執る余裕をあたえないほど充実したものであったと本人も述懐している。²⁰

6日の記述は、日記のいたるところで見受けられるような、淡々とした観察がつづく。

港の飾りが華やかだった / フランス人はロシア、ドイツ、イギリスの人より背が
低く痩せていて東洋人のようである / ノルマンディーの田園風景はイランを思わ
せる / パリまで8時間かかった / 大統領が駅まで迎えに来た / ボワドゥ

¹⁹ Salesse, 36～37頁。

²⁰ Salesse, 187頁。

ブローニュを経て凱旋門に至った / コンコルド広場で国会議長の歓迎の言葉があり、わたしの寝台はナポレオン・ボナパルテが使ったものである / コミューンの人たちは数々の宮殿を燃やしてしまった / 我々が滞在する宮殿の風呂場はお湯も出る素晴らしいものである

政治にかかわるものとしての観察は、もちろん、ある。パリの人たちは普仏戦争の敗北をまだ忘れていないような、喪に服しているようである、と記しているところは、列強のために数々の敗北を喫しているイランのことを考えていたかもしれない。さらに切実な観察は、戦争の勝敗ではなく、王政そのものにかかわる。国王が歴訪している国の中で、フランスは唯一の共和国である。共和制、それとも王制か、またそれぞれの制度の支持者の中でも異なる意見が相争い、国の政体のあり方に関する議論が複雑に渦巻いていると、国王はそれなりに忠実に「実況」している。どちらかの陣営が結束して国をまとめれば、フランスもまた手ごわい強国になるだろうと付け加えているくだりは、政治意識の高さを感じさせる。パリ・コミューンの蜂起のために破壊された数々の宮殿をいかにも惜しそうに列記しているところも、君主ならではの本音が垣間見える。同じように君主らしい記述が、ほかにも数か所ある。ロットシール男爵という大富豪のユダヤ人が国王と謁見してイラン国内のユダヤ人たちが平穏に暮らせるように国王の厚意をねがったとき、〈大富豪だと聞いておる。財産を使ってどこかの国と交渉して領土の一部でも割譲してもらいそこにユダヤ人たちを連れて住まわせれば、もうあちらこちらを彷徨わないですむのだがな〉と答えた、という記述もその一例といえよう。²¹

ただし、7日以降は、謁見に訪れた人物（スエズ運河建設で著名なルセップス氏、国王と他の使節団員の写真を撮った写真家のナダール、ルイ・フィリップ元国王の息子たちなど）や、花火やサーカスや閲兵式といった記述が文章の大半を占める。国王が芸術好きな「エリート観光客」としての本領を発揮しているともいえる。ヴェルサイユ宮殿の美術と庭園、動物園、ルーブル美術館、普仏戦争の「パノラマ」、自然博物館、ゴブラン工房など、実に充実したツアーであるが、近代化を進めようとする君主なら、関心が集中するはずの社会的設備（学校、病院、銀行）の訪問については、ほとんど触れていない。たとえば、造幣局に立ち寄るが、機械や貨幣経済の仕組みをはじめ近代的貨幣政策にかかわる情報よりも、めずらしい硬貨やペルシア語の記念硬貨の鋳造などの描写で終わってしまう。

国王のバリでの滞在は、7月19日の豪華な見送りで幕を閉じる。7時間ほどの汽車の旅を経てディジョンに至るが、日記は、ディジョンがかつてのブルゴーニュ公国の主要な都市でありブドウの栽培が盛んであること、負傷した婦人らの姿など普仏戦争の爪痕がまだ生々しく残っていること、かつてのブルゴーニュ公の宮殿が立派であること、この三つの観察でおわってしまう。つづく20日は、駅や地名の列記に若干の感想をくわえた、地図の文

²¹ Salesse, 194～195 頁。

字化にとどまる記録につきる。

フランスを出た後はというと、7月29日オーストリアハンガリー帝国の首都ウィーンに着き、オペラ鑑賞など皇帝の一族らと華やかな時間を過ごす。8月2日にウィーン万博を訪れる。²² 8月10日、イタリアに入る。文化都市ボローニャに寄ってからアドリア海岸沿いの鉄路で半島の南端に至る。ナーセロッディーン国王がヨーロッパ大陸を後にするのは、ブリンディジ港を出帆する8月13日である。17日一ボスボラス海峡、18日一イスタンブール、25日一黒海。28日からカフカス山脈を越え、その一週間後バクーに入る。カスピ海でまたも荒波に揉まれ大きな恐怖を覚えるが、無事にイランのアンザリーに戻る。9月7日の早朝である。

欧州訪問の成果—観察と改革と記録

欧州で国王の盛大な歓迎に尽力した各国の政府、とくに外交政策を決める高官たちのイラン観になんらかの変化があったか。フランスの場合だけを見れば、そうとも言えない。シャーの歓迎に直接関わった人が作成した正式な記録文書はともかくも、彼らの個人的な日記や自伝で一言も触れない場合もある。例外の一人が当時の「戦争大臣」デュバラユ将軍である。²³ 彼は国王の訪問に回顧録の数段落の紙幅を割くが、その心理描写と晩餐での食欲に触れる記述が主である。一般的な報道も、固定観念に明け暮れるものが目立つ。記者たちは、国王の祖父などによる残虐行為を引き合いに出したり、国王が身につけていた豪奢な宝石の値段に想像を馳せたりして、読者を楽しめるという「任務」を熱心に全うしているわけである。彼らの目には、いや1870年代当時のほとんどの欧州人の目には、ナーセロッディーン国王は近代化を進めようとする指導者ではなく、オリエントならではの専制君主、またフランスの国威を高める手段にしか映らなかった。²⁴

そして、国王はそのイメージを払しょくするだけの姿勢を示すことが出来なかった。1878年、1889年に再三ヨーロッパを訪問したり電信網を整備したりしようとした国王は近代的改革に関心がないわけではなかったが、国内外の反対勢力に対して徹底抗戦の構えをとり、改革を成し遂げるだけのヴィジョンと実力がなかった。欧州訪問の立役者で使節団の先頭に立ったミルザ・ホセイン・カーンをイランに帰国してすぐに罷免してしまう決断が象徴的である。何か月もの見学が一夜にして水の泡となったと思われても仕方がない。ミルザ・ホセイン・カーンの説得で国王がモスクワからイランに帰らせたお気に入りの妻アニスのしわざであると言われているが、もしそうであったとしても、改革という国家的使命感が闇の危機意識に勝らなかったということこそ問題である。逆に、外国の勢力（主に英国）にあま

²² Salesse、251～254 頁。

²³ Salesse、37～38 頁。

²⁴ Salesse、38～40 頁。

りにも有利な条件で進められる「改革」が目立ち、当然ながら国民の反発を買う。その代表的なものは、「タバコ・ボイコット」運動である。1891年に、多くのイラン人が従事していたタバコの生産と販売と輸出という巨額の利権を50年にわたって英国人タルボットに付与する交渉が秘密裏にすすめられたが、発覚すると、死者も出るような全国的な反対運動が沸き起こった。国王は利権の破棄を表明したが、一連の出来事で浮き彫りにされたのは、ナーセロッディーン国王の任期中、数十年前から変わることのない構図である。それは、国王の優柔不断、改革派の外国頼み、そしてその挙句の一般民衆の実生活の困窮という悲しい定石である。

歴史は、しかし、時代から時代へとまっすぐにのびる一本道ではない。歴史的意味は、ある行動から直接因果的に派生するのではなく、行動者らの意図と異なる方向へと展開され、後世の振り返るまなざしの中から生じることが多い。国王の訪欧は、同じく、国王と外国勢力が望んでいたのとは異なる、様々な「意図せぬ」あるいは「逆」効果を引き起こすことで大きな歴史的意味を帯びるようになる。いわゆるタバコ・ボイコット運動がその顕著な例である。運動がそれだけの広がりを見せたのは、皮肉にも、国王が敷設した電信をとおしてタブリーズや各地に情報が出回ったからである。²⁵ ボイコット運動への弾圧は、逆に、さまざまな勢力の同調と協力をもたらした。国王の宮廷ではロシアの影響力が増し西欧との距離が大きくなる。イスタンブールやイラクなどで発行されるペルシア語の新聞が禁止されるが、火に油を注ぐような効果である。1896年に国王がイラン唯一の鉄道の終着点シャー・アブドラジーム寺院で撃たれる後、息子が王位を継ぐが、支持の基盤が弱く、カージャール朝の求心力がますます弱くなる。宗教と階層の従来隔たりをこえた勢力がたちあがり、ナーセロッディーン国王の死後10年の1906年に新しい憲法体制が樹立される。不思議なことに、憲法体制のモデルとなったのは、当時三権分離が徹底され言論や報道の自由の補償範囲が最も広いとされるベルギー国の憲法である。1873年の訪欧記録には、

「ベルギー王国はとても自由である。この国の運営は、代議士たちが集まり法をつくる議会が掌る。議事堂は立派な建物で町中にある。現に会期中であり代議士たちも集まっている。この国では、ジャーナリストたちは完璧に自由である。何を書いても誰にも説明をしなくてよい」

とある。²⁶ ナーセロッディーン国王の意図と無関係な先見性をほのめかす言葉である。実は、同じベルギーで、1894年にナーセロッディーン国王を冒とくした科で『ルプチジュールナル』紙が起訴されたらしい。²⁷ ナーセロッディーン国王は思わずベルギーの自由にも

²⁵ 羽田、190～191頁。

²⁶ Salesse、128頁。

²⁷ Salesse、33頁。

限界があることを証明した。

ところが、先見性と言えるかはさておいて、国王の訪欧の、というより、訪欧記のもっとも大きな成果は、政治や外交を離れたところにある。国王が 1873 年の訪欧の際に綴った「日記」は、すぐに出版され、翌年に英訳される。訪欧記は長い伝統を誇るペルシア文学の流れをくむ貴族趣味的な紀行文ではなく、単純明快な文体を取り入れている。手許にあるのはフランス語訳であるが、観察眼が鋭くその文学的感性も豊かである。確かに読者にとってハードルの低い読み物である。訪問先の国々に関する格調の高い概説や外交政策に関する詳細な考察、さまざまな社会制度や機械の働きなどに関する悠長な解説もない。「普通の」観光客に通じるような素直な感想がほとんどである。あるいは、岩倉使節団の欧米訪問を詳細に描いた久米邦武著の『米欧回覧実記』のやや実務的で官僚風な記録と比べれば、『実記』にない読みやすさと繊細さがあると認めざるをえない。上述したように、国王には文学の素養があり、芸術に対しても理解と感受性があった。絵画や写真など、視覚的なものには目がなかった。ウィーンでのオペラ、ロシアでのバレエ、閱兵式、それらについて実に楽しそうに書いているだけでなく、マダム・タッソー館や動物のはく製や水族館も、まさに、絵の様に鮮やかに描がれている。ここで重要なのは、この日記こそ、近代ペルシア語の形成に貢献した文章として今も評価されていることである。²⁸ 訪欧とその後の改革に関していえば、イラン国民が直接利益を得たとは言えないが、その記録が示した近代ペルシア語の可能性については、国民は確実に恩恵にあずかった。とはいえ、その恩恵もまた思わぬ形をとるのである。

訪欧記のシンプルで実物を生き生きと描くスタイルを見事に受け継いだのは、カージャール朝の無能ぶりと腐敗を容赦のない筆致でやっつける『エブラヒム・ベグの旅日記』(1906 年)である。前者は、政府系の新聞社が出版したのに対して、後者の旅日記は禁止されたが、それでも広く読まれるようになった。その人気の根拠は、内容だけでなく、ナーセロッディーン国王の訪欧記録とおなじく、表現形態そのものにあった。『ベグの旅日記』もまた「現代ペルシア語表現の祖形を提供した平易な文体とリアリズムはその後の立憲革命に大きな影響を及ぼした」とされるわけである。²⁹

この流れと比較して、岩倉使節団の見聞を詳細に紹介している『米欧回覧実記』自体の影響が大きいとは言えない。一般読者の注目を集めるのは、使節団が日本に戻ってから実に一世紀後である。もちろん、ナーセロッディーン国王の訪問記と異なり、一般出版を前提として書かれたものではないからである。ただし、もしも 1873 年に出版されたとしても、近代日本語の祖形と言われるだけの魅力的な文章表現であったとみる人は少ないだろう。その点では、少し前の福沢諭吉の『世界国尽』や『学問のすゝめ』の影響ははるかに大きい。

²⁸ 守川知子「ガージャール朝期旅行記史料研究序説」『西南アジア研究』55 号、44～68 頁。当該箇所は 47 頁。

²⁹ Salesse、45～46 頁。引用文は、『帝国主義と各地の抵抗』、221～222 頁。

実記、訪欧記録、ペルシア体験のまなざし—— 観察と視察と考察

ナーセロディーン国王の訪問団と訪欧記録、またその中でうかがわれるまなざしを、当時の日本人のそれと比較してみるとしよう。

出発当時右大臣と外務卿を兼任した岩倉具視ひきいる使節団について、田中章はつぎの特徴をあげている。³⁰ 1) 総勢 50 人の正式なメンバーの中に、「外国通」だけでなく、実力者も含まれている、2) 旧幕臣（後々明治の新聞界で活躍する福地源一郎など）も多い、3) 使節団の団員たちの年齢は高くない（団長の岩倉は 47 歳、伊藤博文は 31 歳）、4) 使節団は一枚岩ではなく、渡航経験のある「開国論者」もいれば、国際的知識が乏しい人もいる、という 4 点である。正式なメンバーとは別に、使節団に 59 人の留学生（中江兆民、団琢磨、津田梅子…）が参加した。言うまでもないが、彼ら彼女らが日本の近代化において果たした役割は極めて大きい。出発するまえに明らかにされなければいけなかったのは、使節の目標と「留守政府」の地位であった。目標ははっきりとしていた——関税独立の回復など不平等条約の改正である。訪問先では、国書の捧呈・条約改正の打診の準備交渉・調査研究という業務を行うように決められた。留守政府の地位については、「約定十二か条」が定められ、諸制度の現状維持が確約された。出発前に神祇省で「遣外国使祭」が執り行われ、同日の 11 月 4 日に、岩倉らが参朝し、天皇に謁見して勅語を下賜された。12 日出発。³¹

岩倉使節団が当時のイランより政局の安定した国を後にしたとはかならずしも言えない。使節の構想を練ったとされる大隈重信をはじめ、留守政府の重鎮たちは約束通り諸制度の現状を維持するどころか、徴兵制や学制の樹立など全国民の生活に大きくかわる改革を推し進め、太陽暦の導入（1872 年 12 月 3 日／1873 年 1 月 1 日）すら強引に行った。岩倉らの帰国後、征韓論の敗退が参議たちの間に大きな亀裂をもたらし、各地で士族反乱が勃発している。安定からほど遠い社会情勢を物語っている。

また、近代的改革が思うように進まない原因をイランの強力な宗教的伝統に帰一して、速やかな近代化を成し遂げた日本の世俗的傾向を「祝福」するのも、あまりにも単純な捉え方である。イランにおいて、イスラーム教の教義と近代的な科学精神が相いれないものではないと論じた宗派こそ、改革派の宰相に弾圧された。汎イスラーム思想を掲げイスラーム教と近代的な法治国家との両立が可能であると論じたジャマールディーン・アフガーニーを国王が首都に招待する時期もあるが、アフガーニーの提言する改革をすすめようとせずしばらくして彼を国外に追放する。結局、アフガーニーの支持者によって暗殺されてしまうが、もしもアフガーニーのアドバイスを聞き入れていれば、イランの近代化も単なる「挫折」で

³⁰ 久米邦武編、田中章校注『特命全権大使 米欧回覧実記』[一～五]（岩波書店、1982 年 [2011 年]）、解説 393～423 頁。

³¹ 久米、403 頁。

語られなかったかもしれない。一方の日本では、廃仏毀釈の嵐がしずまり宗教的混乱は収まったものの、様々な近代的制度の樹立の陰で、国家神道という、やがて一神教的国教として機能する宗教的体制が作り上げられていく。しかも、その国教が列強の侵入への抵抗の精神的支柱から、列強たる日本のアジアにおける植民地支配を正当化（「天壤無窮」、「八紘一宇」…）するイデオロギーへと「進化」するようになる。

ここで問題にしたいのは、イラン国王の記録が示す、訪欧の事実のほかに、国王による観察という事実、そしてその観察の前提と目標とインパクトという多面的なリアリティー——これらがどのようにイラン国の将来に結び付くか、である。

守川氏は、ガージャール期において、旅行記が豊富に書かれ読まれたことについて、〈周遊旅行〉、〈官命旅行〉、〈巡礼旅行記〉と区別してから、次のように述べている。

「これら多数の旅行記文献は、17世紀には「旅行嫌い」で「他の国々の現状にはなほだ無知」であったイラン人が、その時代とうって変わって、好奇心を持ち合わせて、イラン国内のみならず世界各地へ赴いた産物である。

[中略]

ガージャール朝時代とは、外国、特に先進国として世界をリードしていたヨーロッパとの接触による内省の時代、換言すると、外部からの影響を受けたイランが、政府やその高位高官レベルにおいて、自己認識や自己再発見の模索を始めた時代である。

[中略]

すなわち、当時の政府の関心は、諸外国の動向を知り、その優れた点を取り入れようとする一方で、国内に対しては、ルートの開発や地図の作成といった地理的な知識の収集に加えて、各地方の歴史的・文化的な側面あるいはその帰属意識の把握にも向けられている。」³²

国王の旅行記の性質を評価する際、この「帰属意識の把握」という点が肝心である。それは、「イランとはどうあるべきか」の前提となる「イランとは何か」という、欧州に放たれるまなざしの出発点である。岩倉使節団が日本を出発するとき、「日本」の版図やそれを構成する諸地域に関しては一定の確信はあった。蝦夷地や琉球などがどのように日本に編成されていくかは、確実な見通しがついてはいたわけではないが、国内情勢の安泰を脅かす要素ではなかった。イランは、とくに北部と東部については、その確信が持てなかった。また、明治政府はかつてない中央集権をはかる一方、かつてない規模での人材育成や設備建設を行っていった。高官らの薩摩長州出身者への偏りはあったが、一君万民の旗印の下で、日本の津々浦々で文明開化がすすめられ、やがて浸透していく。日本の君主は「親政」するが、

³² 守川知子「ガージャール朝期旅行記史料研究序説」『西南アジア研究』No.55、2001年、44～68頁。55頁。

維新の時 14 歳だった明治天皇が権力闘争と改革遂行などに直接かかわる必要はない。訪欧は、もちろん、もってのほかである。一方のイラン国王は、振り回し、振り回される。

岩倉使節団とイラン国王が欧州で数週間のずれで同じ場所で同じ人たちに会った。ヴィクトリア女王の謁見などが有名であるが、どの国でも、政治家や実務担当の高官者は数週間の間に変わっていない。いつ誰に面会したか、またその印象などについて明らかにするのはそれとして興味深いが、ここでは、人ではなく、一つの「もの」にとどめたい。

両者が訪れたウィーン万博に注目したい。『実記』の岩波文庫版では、その見学に 2 巻（第八十二巻、第八十三巻）、あわせて 31 頁が割かれている。実に細かい描写である。久米の記述は各国の館で展示される製品が表す国民性だけでなく、それぞれの製品の仕組みや働きなどを、一種の「製作者目線」で紹介している。その目線は、久米だけのものではなかった。

「博覧会」という形式は日本で早くから注目されすぐに定着する。1877 年に東京上野でおこなわれる第一回内国勸業博覧会を皮切りに、この「文明開化の視覚的装置」が何度も開かれる。



ウィーン万博のペルシア館³³

久米は、日本の出品について、「近年日本ノ評判欧州ニ高」いと認めつつも、展示されている陶器、漆器、絹、寄木細工などなどについて、辛い評価を下す。公園の端にある売店（「市肆」）では、日本の木工の技術のレベルの高さが欧州人を驚かせ、日本館の土産を買う人が多い（「日本ノ物品ヲ買テ帰ラサレハ、人ニ対シテ緊要ノ珍ヲ遺却セル如キ思ヒヲナシ」）と書いてはいるが、「珍」という欧州人の視線への反感が垣間見える、かなりクールな感想である。³⁴

ただし、「波斯国」の大館に対する評価も厳しい。ガラスの飾りが目立つ建築であるが、堅牢なつくりではなく、側を通っただけでガラスが落ちてきそうである、と。「中ニ種種ノ物品、及ヒ風俗ニヨリテ人ヲオキタレトモ、嘉尚スルニタラス」と一蹴している。

³³ <http://www.tehranprojects.com/Early-Iranian-Pavilions-at-the-World-Expos>（最終閲覧 2021 年 2 月 10 日）

³⁴ 『米欧回覧実記』、第五巻。あるいは、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761506> (doi 10.11501/761506)

久米の辛口の評価には、一抹の蔑視がすでに混ざっているといえないだろうか。それは、数週間後にウィーン万博で同じペルシア館をみて、「大変美しい」と評した訪問客の視線と対照的である。もちろん、ナーセロッディーン国王の評価である。3 か月で建てなければいけなかった建築担当の人と会話を交わした国王は、めずらしいことに、万博の費用について数行を加えるが、全万博に割かれる2 ページは、オーストリア皇帝と共に回ったこと、出品されたものは趣味が良かったことなどの記述にとどまる。わたしの把握する限り、19 世紀のイランで博覧会という近代的な「視覚的装置」が根を張ることはなかった。ウィーン万博は国王の洗練された観察目に実に華麗で豪華なものに写ったようであるが、博覧会が「美」ではなく、知識と技術と国力とを誇示する場であったという意識は、この記録から読み取れない。そして、イランの読者たちにそのような眼差しを期待することはもちろん、植え付けようとする素振りもなく、万博の記録が終わってしまう。

明治時代において、久米らだけがペルシアに対する無関心とも侮蔑ともつかない眼差しを注いでいたわけではない。明治2 年(1869 年)の『世界国尽』では、すでに福沢諭吉が「人家さだまり文字あれども人情いやし「とるこ」「ぺるしや」のごとし」と記している部分がある。³⁵ 近代日本において、福沢と久米がすでにあらわしたアジア観は、博覧会への情熱に劣らず、深いところに根を張ってしまう。

ロシアと英国という列強に対して自国の主権を守る点では、日本とイランは共通の課題に直面していたが、イランは日本にとって戦略的なパートナーになることはなかった。むしろ、西欧と中心とする世界観を取り入れ、それにおいて日本の独自な地位を獲得しようとする明治時代の知識人層・指導層にとって、あまり関心のない土地であった。その無関心が如実に表れたのは、1881 年の吉田正春によるペルシア視察である。

視察のきっかけは、いみじくも、1880 年に2 度目の訪欧を敢行したナーセロッディーン国王と、日本から派遣された特命全権大使榎本武揚がサンクトペテルブルクで鉢合わせをしたことである。国交樹立に直結する邂逅ではなかったが、面会の末、貿易の可能性をさぐるためのイランでの現地調査が許可された。派遣された吉田は、高知の幕末史に名を飾る吉田東洋の息子で、外務省御用掛だった。後藤猪太郎³⁶などをつれて、演習のためインド洋に向かう軍艦比叡に同乗して、1880 年の春に出発する。³⁷ イランの南海岸から砂漠を縦断するという大変な苦勞をしてやっと首都のテヘランに至る。国王との謁見を果たし、英仏墺などの外交官たちの交流もあるが、結局は、大きな成果もなく日本に戻ることになる。それでも、山中が指摘するように、吉田の残した記録から興味深いことが読み取れる。それは、国王は近代的改革に熱心な顔こそ見せるが、一部の皮相な「近代的」場所あるいは組織をのぞけば、圧倒的に近代化が進んでいないイランの現状が目につく。もう一つは、イランの上滑

³⁵ 『福沢諭吉選集 第二巻』(岩波書店、1981 年)、132 頁。

³⁶ 後藤象二郎の長男は、猛太郎である。同一人物か。

³⁷ 山中由里子「明治日本人のペルシア体験」『比較文学』1993 年、35 巻、117～128 頁。

りな近代化への嘲笑を隠さない欧州の外交官たちと会話をする時に吉田が感じた、身につまされる思いである。自らの長所を捨ててまで西欧諸国の模倣をすることでよい——それは国王とその周辺のイラン人だけではなく、明治時代の日本人の心にも影を落とす観察である。イラン人は、西欧的な価値観と制度を速やかに、巧みに導入するのに失敗したとするのは、あまりにも一方的な見方であるのではないか、と。

むすび

訪欧の成果をどう評価するか。岩倉使節団とその後の西洋文明の受容を基準にするのであれば、イランをはじめ他国の成績は「不可」である。なぜなら、速やかな近代化、強国という地位の獲得に繋がらなかったこれら使節団は、成功したとは言えない。ただし、そう簡単に割り切れる問題ではない。上で触れた、同時期にヨーロッパを訪れたオスマン帝国のスルターン（1867年）やシアム王国（1898年）のそれと比較すると、イラン国王の訪欧は共通した目標と成果とが認められる。M.パラビイクは、訪欧という企画について、西欧をモデルとした国づくりの布石というよりも、波乱の帝国主義時代において自国の独立を守り自らが君主としてふさわしいことを示すための行動であると分析する。欧州を旅する狙いは、研修と調査というのも課題とされるが、それより、みずからの姿を見せること、十分に文明的で、そのため「同等の扱いに値する」君主としての存在をアピールすることであった。「それらは、自己投影のプラットフォームとして、これらの君主たちが文明的であったことを証明する手段として構想された」、と。³⁸

欧州の国々がそのように受け止めたかは判断しにくい部分もある。実は、先頭を切る 1867 年のオスマン帝国のスルターンの訪欧は、トルコだけでなく、訪問先の英国などでも前例がなかった。岩倉らが受けた歓待は、1867 年につくられた前例を踏襲したものであった可能性が高い。ただし、国内へのインパクトは小さくなかった。イラン国王の度重なる国内旅行の動機も、見るのではなく、自分を見せることだった。この視点に立つと、訪欧する国王の姿は「エリート観光客」の様相を呈しているが、政府系の新聞に出され広く国民に共有されていくその記録の効能はけっして“観光ガイド”に止まらない。

要注意なのは、この分析では、すべてが計画通りに行われたというような印象を受け、ナーセロッディーン国王の立場の不安定性が伝わってこない。彼は宮廷の要人たちのほとんどを連れて行ったのには、政治的な理由があった。つまり、連れて行かなければイランに残ったものたちが何をするか不安であったからである。そして、案の定、帰国させられた正妻アニスの目論見や宮廷内の争いのため、帰国したばかりの改革派の宰相は罷免に追いやられる。そして、1890 年代以降の出来事を考えると、反対運動の標的になりやすくなったという、まさに意図せぬ「見える化」もそこで起きてしまったかもしれない。

³⁸ M. Palabiyik, 204 頁。

一方の日本の留守政府はというと、むしろ、とんとん拍子で改革を進める。たとえば、明治5年（1872年）8月2日の太政官第214号での学制である。近代的な教育体制の発端であるが、岩倉使節団がアメリカ東海岸で大西洋をわたる準備をしているときである。その少し前に、岩倉使節団長がアメリカ人の目を意識して、身なりを和服から洋服に変えた。

君主自らの外遊は、国の安定からすれば、リスクを伴う。イランやトルコなどの場合、それだけ必死な企画であった。岩倉使節団を出した日本国の君主の外遊はどうか。大正天皇は皇太子の頃に朝鮮半島を訪れ、昭和天皇も皇太子の頃に欧州を旅行したが、天皇自らが国外に出るのは戦後のことである。明治時代に行われた数々の行幸は、まぎれもなく、「見える化」を意図としていたが、皮肉なことに、日本の帝国が拡大していくのに伴って、天皇の一種の「見えざる化」が進み、戦前戦中の「見べからざる化」に至ってしまう。日本の君主の訪欧はイラン国王のそれより100年近く遅れて実行される。

++++

図1 岩倉使節団（1871～1873 年）とナーセロッディーン国王訪欧（1873 年）の旅程
（訪問地の地名と時期）

グレー：重複の期間

岩倉使節団		ナーセロッディーン国王	
到着した地名と年月日（欧州のみ）		到着した地名と年月日	
出発 横浜 1871 年 12 月 23 日		出発 テヘラン 1873 年 4 月 19 日	
リバープール	1872 年 8 月 16 日	ツァリーツィン	5 月 16 日
ロンドン	8 月 17 日	サンクトペテルブルク	5 月 22 日
パリ	12 月 16 日	ベルリン	6 月 1 日
ブリュッセル	1873 年 2 月 17 日	バーデンバーデン	6 月 11 日
ハーグ	3 月 2 日	スパ（ベルギー）	6 月 13 日
ベルリン	3 月 9 日	ブリュッセル（国王謁見）	6 月 17 日
サンクトペテルブルク	3 月 30 日	ロンドン（女王謁見）	6 月 20 日
コペンハーゲン	4 月 18 日	リバープール	6 月 26 日
ローマ	5 月 11 日	シェルブール	7 月 5 日
ウィーン	6 月 3 日	パリ	7 月 6 日
ベルン	6 月 30 日	ディジョン	7 月 19 日
マルセイユ	7 月 20 日	スイス	7 月 20 日
	→ 帰途につく	イタリア	7 月 24 日
		オーストリア	7 月 28 日
		ブリンディジ	8 月 13 日
		イスタンブール	8 月 18 日
			→ 帰途につく

参考文献

洋書

Axworthy, Michael. *Iran, Empire of the Mind: A History from Zoroaster to the Present Day* (Penguin, 2008)

Dumoulin, M. “Les premières années de la présence belge en Perse (1887-1895)” in: *Revue*

Belge d'Histoire Contemporaine, vol.8, nos.1-2, 1977 年, 1～52 頁

Palabiyik, Mustafa Serdar. “The Sultan, the Shah, and the King in Europe: The Practice of Ottoman, Persian and Siamese Royal Travel and Travel Writing” in: *Journal of Asian History* 50(2), 2016 年, 201～234.

Salesse, Bernadette. *Journal de voyage en Europe (1873) du shâh de Perse Nâser Ed-dîn Shâh Qâjâr* [traduit du Persan, présenté et annoté par Bernadette Salesse] (Sindbad, Actes Sud: 2000 年)

和書

久米邦武編、田中章校注『特命全権大使 米欧回覧実記』[一～五] (岩波書店、1982 年[2011 年])、解説 393～423 頁

—— <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761505/141> (国立国会図書館 特命全権大使米欧回覧実記. 第 4 篇 欧羅巴大洲ノ部 中)

羽田正『イラン史』(山川出版、2020 年)

福沢諭吉選集 第二巻 (岩波書店、1981 年)

藤沼貴『ロシア その歴史と心』(第三文明社、1995 年)

南塚信吾『「連動」する世界史——19 世紀政界のなかの日本』(岩波書店、2018 年)

守川知子「ガージャール朝期旅行記史料研究序説」『西南アジア研究』55 号、2001 年、44～68 頁

歴史学研究会編『世界史史料 8 帝国主義と各地の抵抗』(岩波書店、2019 年)

山中由里子、「明治日本人のペルシア体験」『比較文学』1993 年、35 巻、117～128 頁

図

<http://www.tehranprojects.com/Early-Iranian-Pavilions-at-the-World-Expos>

(ヨース ジョエル・本学教授)